

群馬大病院、手術成績「おおむね良好」…7人死亡後に学会発表

2014年11月17日 読売新聞

群馬大病院で腹腔鏡を使う高難度の肝臓手術を受けた患者8人が死亡した問題で、8人の手術の執刀医ら第二外科のグループが今年4月の学会で、手術成績について「おおむね良好な結果」などと発表していたことがわかった。

この時点ですでに8人中7人が死亡、1人は容体が悪く入院中で1か月後に亡くなった。

この問題では、2010～14年に同科で肝臓の腹腔鏡手術を受けた92人のうち、8人が100日以内に死亡した。死亡率は8.7%で、専門家は「非常に高い」と指摘している。

今年4月に京都市で開かれた日本外科学会の学術集会では、執刀医が第二外科の責任者である同科教授らと連名で、手術実績を分析した内容を発表した。

発表では、腹腔鏡手術は開腹手術に比べ手術時間は長いものの、合併症の頻度はあまり変わらず、在院日数は短い傾向にある、という趣旨の症例分析を報告。まとめとして「腹腔鏡下肝切除は手技(手術の技術)の工夫によりおおむね良好な結果と期待される」と結論づけていた。

執刀医らのグループは、10月に盛岡市で開かれた日本内視鏡外科学会でも発表を予定していた。様々な工夫により、難しい肝切除や胆管と腸をつなぐ手術が腹腔鏡でできるようになったと報告する内容だった。

ところが、こうした手術を受けた8人がすでに死亡し、事態を重くみた大学病院による調査が6月から始まったなかで、この発表は事前に取り下げられた。